

## 『万葉集』初期の挽歌

荻原 千鶴

## 1. 万葉初期挽歌としての倭太后歌

『万葉集』巻二に、天智天皇の死を悼んだ倭太后の四首の歌がある。天智天皇の死が西暦 671 年 12 月であること、翌年 6 月には壬申の乱が勃発していることから、これらは 671 年 12 月から 672 年 6 月の間に成ったと思われる。

天皇の聖躬不予したまふ時に、大後の奉る御歌一首

A 天の原 振り放け見れば 大君の 御寿は長く  
天足らしたり (巻 2—147)

一書に曰はく、近江天皇の聖体不予したまひて、御病急かなる時に、大後の奉る御歌一首

B 青旗の 木旗の上を かよふとは 目には見れども  
直に逢はぬかも (148)

天皇の崩りましし後の時に、倭太后の作らず歌一首

C 人はよし 思ひやむとも 玉纒 影に見えつつ  
忘れぬかも (149)

大後の御歌一首

D いさなとり 近江の海を 沖放けて 榜ぎ来る船  
辺つきて 榜ぎ来る船 沖つかい いたくなはねそ  
そ 辺つかい いたくなはねそ 若草の 夫の  
思ふ鳥立つ (153)

これらの歌は、夫の死を嘆き悼む「挽歌」といえるが、万葉初期において、〈人の死を嘆き悼む〉表現はどのように成立してくるのか、その道程を探り、あわせて倭太后歌の新たな解釈を提示することを試みたい。

## 2. 倭太后歌の前史

倭太后以前に、人の死に関わる場に登場する歌を概観する。

I 『古事記』中巻(景行天皇) 后たちによる倭建命の死を嘆く歌

なづきの田の 稲幹に 稲幹に 這ひ廻ろふ  
野老蔓

浅小竹原 腰なづむ 空は行かず 足よ行くな  
海処行けば 腰なづむ 大河原の 植ゑ草 海  
処はいさよふ

浜つ千鳥 浜よは行かず 磯伝ふ

II 『万葉集』巻三—415 聖徳太子による龍田山死人を悼む歌

家にあらば 妹が手まかむ 草枕 旅に臥やせ

る この旅人あはれ

III 『日本書紀』巻二十五(孝徳天皇) 大化五年(六四九) 三月 野中川原史満による造媛の死を嘆く歌

山川に 鴛鴦二つ居て 偶ひよく 偶へる妹  
を 誰か率にけむ 其一

本毎に 花は咲けども 何とかも 愛し妹が  
また咲き出来ぬ 其二

IV 『日本書紀』巻二十六(齊明天皇) 齊明天皇四年(六五八) 五月・十月 齊明天皇による建王の死を嘆く歌

今城なる 小丘が上に 雲だにも 著くし立  
たば 何か歎かむ 其一

射ゆ鹿猪を 認ぐ川上の 若草の 若くあり  
きと 吾が思はなくに 其二

飛鳥川 漲らひつつ 行く水の 間も無くも  
思ほゆるかも 其三

(以上、五月条)

山越えて 海渡るとも おもしろき 今城の  
内は 忘れゆましじ 其一

水門の 潮のくんだり 海くんだり 後も暗に  
置きてか行かむ 其二

愛しき 吾が若き子を 置きてか行かむ  
其三

(以上、十月条)

V 『万葉集』巻二—141・142 有間皇子による自傷歌 ←齊明四年(六五八)

岩代の 浜松が枝を 引き結び ま幸くあら  
ば またかへり見む

家があれば 筥に盛る飯を 草枕 旅にしあ  
れば 椎の葉に盛る

VI 『日本書紀』巻二十六(齊明天皇) 齊明天皇七年(六六一) 十月 中大兄皇子による齊明天皇の死を嘆く歌

君が目の 恋しきからに 泊てて居て かく  
や恋ひむも 君が目を欲り

I は恋の民謡や童謡の転用説もあり<sup>(1)</sup>、歌謡内部から、人の死を嘆き悼んだと特定できる表現を見出すことはできない。〈人の死を嘆く〉ことは、むしろ歌謡外部の文章に支えられている。

II は聖徳太子伝説が形成されて後の仮託であり、七世紀初頭の太子の実作とは考えられない。

III については、野中川原史満が渡来系氏族であって、漢籍の素養の考えられる人物であることが、諸氏によって指摘されており、様々な漢詩が典拠として指摘されている<sup>(2)</sup>。漢詩を踏まえつつ、連れ添った

配偶者を突然、死によって奪い去られた悲しみや、花と対照される回帰しない人事への悲しみをうたうところに、死者を嘆き悼む挽歌の表現が成り立ちえているのを見ることができる。すなわち 649 年に、渡来系の人物によって、〈夫が妻の死を嘆く〉挽歌が、中国の挽歌詩の知識を倭歌の形式に翻案し、漢籍の知識と日本的表現を融合させることによって誕生したといえる。

IVについては、斉明天皇の実作か否かはさておき、親しい者の死（孫の死）を嘆いたと見なしうる表現が、なかば成立しているといえる。ただし意味が捉えにくく、表現が自立しきれているとは言い切れない面がある。「今城」「おもしろき」「潮の下り」「置きて行く」などに殯宮儀礼との関わりが窺え、漢籍の反映の窺われるⅢとは異質の、日本的死生観を反映した詠みぶりである。

Vに関しては、置かれた境涯を詠嘆したものであって、自身の死の可能性を意識しているとしても、それは人の死を嘆き悼む歌とは言えないため、ここでは割愛する。

VIは、中大兄皇子が母斉明天皇の死を悲しんだ歌だが、「目に恋ふ」「目を欲る」は『万葉集』では恋歌にみられる表現である。VIも恋歌とみなしえないわけではないが、「泊てて居て」の句がこの場の特殊状況を提示し、一首が行幸先で亡くなった斉明天皇の護送に関わり、〈死者を嘆く〉ものであることを、辛うじて保証する。これも漢籍的表現とは異なっており、661年段階において、親しい者（母）の死を倭歌の発想形式で嘆いたと見なしうる表現が成立している。

### 3. 「見る」こと

以上のような前史をふまえつつ、冒頭にあげた倭大後の歌について考察する。VIの中大兄皇子歌が「目に恋ふる」こと、「目を欲る」ことを歌い、挽歌的表現を成していたことに留意したい。

「目」は「見る」器官であるが、『古事記』『日本書紀』などに残される古代の歌謡や『万葉集』の歌の中には、「見る」ことをうたうものがたいへん多い。

「見る」というと、今日の私たちは目という視覚器官を通して外界を認識する行為であると考えられる。だが、日本古代の人々にとって「見る」ことは、単なる視覚認識行為にとどまらず、それ以上の大きな意味をもっていた。土橋寛氏<sup>9)</sup>以来、たびたび論じられてきているように、古代の人々にとって「見る」ことは「タマ（霊力・生命力）」の活動に関わる行為であり、「見る」ものと「見られる」ものとの間にはタマの交流があると考えられていた。

たとえば、『万葉集』の相聞の歌を考えてみよう。

柿本朝臣人麻呂、石見国より妻を別れて上り来る時の歌

……玉藻なす 寄り寝し妹を 露霜の 置きてし来れば この道の 八十限ごとに 万たび かへり見すれど いや遠に 里は離りぬ いや高に 山も越え来ぬ 夏草の 思ひしなへて 偲ふらむ 妹が門見む なびけこの山 (巻2—131)

反歌

①石見のや 高角山の 木の間より 我が振る袖を 妹見つらむか (132)



大崎鼻から「角の浦回」「高角山」を望む

上掲の①は、「いや遠に里は離りぬいや高に山も越え来ぬ」という時点で、既に遠く隔たった妹に向かい、実際には見えない距離から袖振りがなされている。それを「見つらむか」と詠みうるのはなぜか。

②足柄の み坂に立して 袖振らば 家なる妹は さやに見もかも

右の一首、埼玉郡の上丁藤原部等母麻呂

『万葉集』巻20—4423)

埼玉郡の「家の妹」が足柄を見るのは不可能であるから、②の「見る」も、単なる視覚認識行為としてでは理解できない。そこには互いに「見たい」と念ずる者同士、タマの働きが意識されていたはずである。

万葉初期の挽歌においても「見る」ことの呪的意義を考えることは、重要であると思う。冒頭にあげた倭大後の挽歌四首について、「見る」ことが歌をいかに形作るかを考え、従来の解釈とは異なる読みを提示してみたい。

### 4. 倭大后歌 147 の検討

倭大後は天智天皇（671年死去）の皇后だった女性であるが、子女はなく、生没年・閏歴ともに不明である。『万葉集』巻二には天智天皇の周りにいたと考えられる女性たちの、大津宮での天皇の死に臨んでの一連の挽歌が載せられているが、中で最も多くの歌を残しているのが倭大后である。この倭大後の歌には「見る」ことが繰り返したわれている。



草津市側より「近江の海(琵琶湖)」越しに、大津宮のあたりを望む

まず A (147) の「振り放け見れば」を考えてみよう。見ル・問フなどに接する補助動詞としての「放く」は、「視線や言語を主体から外部へ押しやる心理のもとに用いたものか」とする『時代別国語大辞典上代編』④の見解が重要である。前掲①②にあったような、山中や峠にあって振る袖は実際には見えるはずがないのに、「見る」ことを想像する、その想像を可能にするのはどういう心意なのか。それは遠くを見る際の、「振り放け見る」行為のもつ「目」の働きと関係があるのではないだろうか。①では、妹が「目」を「放け」て「見」ていると信ずるからこそ、「我が振る袖」がまさしく「見」られうることを信じる（ように歌いうる）のである。相手が「振る袖」を「見る」とは、袖振ることにより相手の振り放け見る目を招きよせる（ように思いうる）行為なのだと考えられる。

「振り放け見る」にはまた、次のような用例がある。

③遠き妹が 振り放け見つつ 偲ふらむ この月の面に 雲なたなびき (巻 11—2460)

次のような歌を参考にするると、『万葉集』において月は、その面に思う人の影を宿すものである。

④我妹子や 我を思はば まそ鏡 照り出づる月の影に見え来ね (巻 11—2462)

影(カゲ)は古代人にとって、淡い光であり、水などに写った投影であり、光を妨げた物体の映ずる薄暗い部分であり、そしてまた靈魂の姿でもあった。③で遠くにいる妹が「振り放け見」ている月は、妹の「放け」た「目」のありどころであり、作者もその月を「振り放け見る」ことによって、妹とのタマの合いと目の合いが実現される。だからこそ、④のように月面に妹のタマの姿形としての「影」を「見る」ことが可能だったのだ。「振り放け見る」ことは、このように知覚の作用における対他と対自を、同時に含みもつ行為であった。

以上のように「振り放け見る」行為がタマの合い

に関わることを考えるならば、Aは、通説に言われるような、招魂儀礼の中で儀礼の趣旨に沿って歌われたものというよりはむしろ、はるかに振り放け見た天の原に大君の「御寿」を「見」たと歌い、乞い求める大君とのタマの合い・目の合いを果しえたという、相聞的発想の歌なのだといえる。

## 5. 倭太后歌 148 の検討

B (148) では「目には見れども直に逢はぬかも」と、「直に逢う」と「目に」「見」ることとの違いがうたわれている。その違いとは何か。

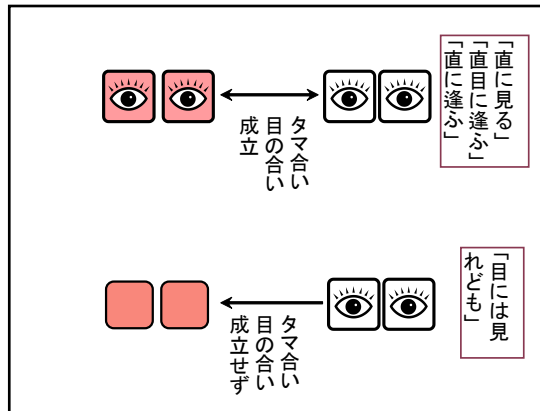
⑤まそ鏡 直にし妹を 相見ずは 我が恋止まじ 年は経ぬとも (巻 11—2632)

⑥音のみを 聞きてや恋ひむ まそ鏡 直目に逢ひて 恋ひまくもいたく (2810)

⑦目には見て 手には取らえぬ 月の内の 楓の如き 妹をいかにせむ (巻 4—632 湯原王)

⑧み空行く 月読壮士 夕さらず 目には見れども 寄るよしも無し (巻 7—1372)

⑤⑥の「目」は相手の「目」をとらえているが、⑦⑧の相手の「目」はこちらに向けられていない。すなわち「直に逢ふ」では「目」の働きが相互通行的であるのに対し、「目には見れども」では「目」の働きは一方通行なのである。



このことから B を考えれば、倭太后は夫の靈の通うのを自分の「目に」「見」た、しかしそれは倭太后の一方通行的行為であって、夫の「目」は倭太后には向けられていなかった、夫の思念は倭太后の方には向いていず、タマの合いを果たすことができなかった、そのことの嘆きが「目には見れども直に逢はぬかも」なのだと思われ。B の題詞が異例であることから資料の紛乱が想定され、このことから B は天皇危篤時の歌ではなくて、天皇崩御後の歌である可能性も考えられる。危篤の天皇の、あるいは亡き天皇の靈を「目に」「見」、「直に逢」わぬことを嘆くのは、『万葉集』中の他の用例が生ける恋人への相聞

の情をうたうのに比べれば異例であるが、「若草の夫の思ふ鳥」(D)とうたうように、倭太后が夫亡きあとも夫の思念の働きを身近に感じていることを考えれば、Bを上述のように理解することは十分可能性がある。むしろ、倭太后が生者への相聞表現を用いることによって、夫への挽歌を成していることが重要である。

#### 6. 倭太后歌 149 の検討

C (149) についての従来の解釈は、初二句を「他人はたとえ思ひやむことがあるうとも」などと解し、一首を「一般の人の心理の必然に対照させた自身の深い嘆きを以て、自らの中にのみは故人の面影が見えつづけて忘れられぬという、思慕の情が詠嘆されている」<sup>6)</sup>などとみる点、ほぼ共通している。しかし、A・B、および後述する D (153) の一連の倭太后歌は、いずれも自分と夫の二人の間の世界の中に閉じられているので、そこに他者の思いがうたわれるのは、唐突である。

「人はよし思ひやむとも」の「よし」は、仮定条件を提示するのが本義ではなく、許容・認容の表現である。「ほかの人は思ひやむ。思ひやんでもよい(しかたがない)」と、「人」(ほかの人)の「思ひやむ」ことを事実として認容し、対するに自身の思いの継続を「忘れぬかも」と意志ではなく慨嘆で歌うのは、呼応関係がちぐはぐであり、他者への対し方としても奇妙である。

他者の死者思慕の情を、別人が「思ひやむ」と判定したり規定したりできるだろうか。思うまいとしても思ってしまう、「忘れぬ」のが死者への追慕の情だろう。それを、他者の心情について「思ひやむ」と事実として規定するところに従来の解釈の不自然さがある。

『万葉集』中、死者への追慕の情の消えることを「思ひやむ」といった例はなく、思ひや恋が「やむ」ことを歌うのは、

直に逢ひて 見てばのみこそ たまきはる 命に向かふ  
吾が恋止まめ (巻4—678 中臣女郎)

など、逢うことの実現を条件とした相聞歌が多い。挽歌において死者を忘れないこと、忘れられないことをうたうものとしては、

明日香川 明日だに見むと 思へやも 吾が王の御名忘れせぬ  
(巻2—198 柿本人麻呂 明日香皇女の城上の殯宮の時に作る歌)

など数例あり、198 が妻をなくした夫君の心情に沿ってうたっているのをはじめとして、いずれも相聞的発想に支えられたものである。

そもそも「忘る」は、相聞歌に圧倒的に多くの用例をみる。Cと同形の「忘れぬかも」も、『万葉集』

中に他に四例あり、

しくしくに 思はず人は あるらめど しましくも  
吾は 忘れぬかも (巻13—3256)

など、恋人か肉親(いずれも生者)を対象としている。3256に端的に表れているように、「忘れぬ」嘆きは自分のことを思ってくれない人を、(忘れたくても)忘れられない嘆きであることが、しばしばだった。倭太后の「ぬかも」がBにみたように、悲嘆の底に願いをたたえたものであることを考えるならば、Cは、すでに自分を思ってくれない人(すでに自分への思いを絶った人)を忘れようにも忘れることのできない悲嘆を歌ったものと解するべきではないだろうか。「人はよし」といわれた「人」が亡くなった夫であるとするならば、上述のような初二句の違和感は解消され、Cも夫との間のみ閉じられた倭太后歌の時空にとどまるものとして理解できる。また前半に夫の行為をいい、後半にその行為が自分と必ずしも全一に相結ばない嘆きを歌う構成がBと一致し、「ぬかも」の結語を共有する二歌の理解としても自然であることになる。

従来の諸説が、「人」が夫(天智天皇)であることの可能性を全く考えもしなかったのは、死者の行為として「思ひやむ」と言うことなど研究者に考え付かれなかった上に、同じ歌群の額田王作歌中の「もしきの大宮人はゆき別れなむ」(155)と呼びさせて、人々の心の離れを考えられたりしたからだろう。

だが、倭太后歌の発想の特性は、亡夫に対してどこまでも生きているかのようにうたい、夫の思いが死後も続いていると信ずるかのようにうたうところにある。Bで夫の「目」をとらえられなかった倭太后が、夫の心が自分にもはや向いていないことを嘆き、Cで夫の自分への「思ひ」のやむことをうたうのは、きわめて自然な感情の流れといえ、そう解することによって「よし」のもつあきらめを湛えた許容・認容のニュアンスが、よく理解できるものとなる。

#### 7. 倭太后歌 153 の検討

最後のD (153) について詳述する違はないが、「沖放けて榜ぎ来る船」を「見放」ける倭太后の目は、船そのものや、「若草の夫の思ふ鳥」、すなわち今も夫が思い続ける鳥<sup>6)</sup>と一体化していることに留意したい。

Dにたって、倭太后はすでに「かよふ」さま(B)も「影」(C)も「見」ることができず、かろうじてはらかな湖上の船と同化しつつ、波間に浮かぶ水鳥に、夫の思いを感じとるのみである。倭太后歌は全体として、「見る」ことと、そこに喚起される情動において、一連の流れを形成しているとみることができる。

## 8. 『万葉集』初期の挽歌

日本古代における、死者を悼み嘆く歌の誕生は、渡来系の人物による漢詩の翻案が一つの契機を提供していることは間違いない。それは、親しい者を失ったとき、悲哀の念をふり絞るようにして歌のことに結ぶという営為が在ることを、指し示すものであった。そうした営為を、初期万葉の人たちが自らの営みとして引き取ったとき、彼らはどのように倭歌を紡ぎ出そうとしたのだろうか。

彼らのとりあえずとった方向は、漢詩文の翻案ではない。彼らの側に既に在ったもの、人亡き後もその人のタマの活動を観ずる死生観にもとづいて、じぶんたちの歌をうたおうとした。であればこそ、彼らはまず、亡き親しき者への心情を、「見たい」という相聞のことばで表現しようとしたのではないだろうか。中大兄皇子のVIはもちろん、斉明天皇のIVの一首目

今城なる 小丘が上に 雲だにも 著くし立たば  
何か歎かむ

も、「雲」さえ立てば亡くなった子のタマの姿が見られるのという、タマを見たいと念ずる歌の一つである。そうした《亡き人を見たい》とうたう系譜の中に、倭大後の歌の位相も見定めることができるだろう。

### 注

1. 土橋寛『古代歌謡全注釈古事記編』(角川書店、1972年)、高木市之助『吉野の鮎』(岩波書店、1941年)
2. 身崎壽「野中川原史満の歌一首」(『言語と文芸』79、1974年4月11日)、塚本澄子「孝徳・斉明紀の挽歌における詩の成立の問題」(『万葉とその伝統』桜楓社、1980年)、内田賢徳「孝徳紀挽歌二首の構成と発想」(『万葉』138、1991年3月)
3. 土橋寛『古代歌謡と儀礼の研究』(岩波書店、1965年)
4. 『時代別国語大辞典 上代編』(三省堂、1983年)
5. 青木生子『万葉挽歌論』(塙書房、1984年)
6. 西郷信綱『万葉私記』(未来社、1970年)

おぎはら ちづる／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授